

# 身体装飾としてのピアス・いれずみの実態とそのイメージの検討

## —賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との関連から—

田中 孝<sup>1</sup> ・ 水津 幸恵<sup>2</sup>  
大久保 智生<sup>3</sup> ・ 鈴木 公啓<sup>4</sup>

### 要 約

本研究の目的は、ピアスやいれずみなどの身体装飾に対する経験や許容、イメージの実態を明らかにし、身体装飾へのイメージと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について検討することであった。大学生360名、社会人225名が調査に参加した。調査の結果、特に30代において、身体装飾への経験、許容が高いことが明らかになった。身体装飾へのイメージについては、4因子が抽出され、それぞれのイメージについて、性差や世代間による差がみられた。身体装飾へのイメージは、自己呈示のあり方に関わる賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の両方と関連していることが明らかとなった。

キーワード：身体装飾、ピアス、いれずみ

### 問題と目的

近年、青年を中心に身体装飾としてのピアスやタトゥーなどの人気が高まってきており、ピアッシングやいれずみをしている者の数が増えてきただけでなく、より広い範囲の社会階級にまで広まってきている (DeMello, 2003; Sanders, 1989)。身体装飾とは、身体に何らかの装飾を施す行為であり、本研究ではその中でもピアスといれずみを指すものとする。従来、身体装飾という行為に対して、抵抗感や否定的なイメージをもたれることが多かった。しかしながら、この身体装飾への意識は、現代社会において変化してきていると考えられる。

ピアスについては1990年代初頭から2000年代にかけて流行し、増加したことが村澤 (2002)

の調査から明らかになっている。また、大久保・鈴木・井筒 (2010) の研究においても、ピアスは現代の青年に許容されていることが示されている。しかしながら、この着用率の増加は10代、20代などの若者を中心としたものであり、村澤 (2002) の調査からも10年以上経過していることから、現代の様々な世代におけるピアスへの許容や経験については明らかにされていない。いれずみについては、江戸時代においていれずみを入れた者が、侠客や博徒など特殊な集団に属したことから刺青を否定的にみる風潮があり (村澤, 2002)、いれずみの習慣は日本において特異的なものとしてとらえられてきた。しかし、タトゥーやボディペイントが出現し、雑誌等のマスメディアにも取り上げられる

1 東大阪市教育センター (Higashiosaka Education Center)

2 高松市立鬼無幼稚園 (Kinashi Kinder Garten)

3 香川大学教育学部 (Faculty of Education, Kagawa University)

4 東京未来大学こども心理学部 (School of Child Psychology, Tokyo Future University)

ようになったことから、現代では許容されている部分もあると考えられる。しかし、いれずみ行為についての経験や許容についての詳細に検討した研究は見当たらない。このように、若年層を中心に身体装飾の経験や許容は変化してきたことがうかがえるものの、現代における様々な世代の身体装飾の経験や許容については明らかにになっていないのが現状である。

また、身体装飾の実態を明らかにしていく上で、経験や許容のほかに身体装飾の意味づけを考慮するためにも身体装飾へのイメージについても検討する必要がある。ピアスへのイメージについて、金(2006)は、女子大生を中心とした調査を行い「内面的イメージ」、「女性的イメージ」、「否定的外見イメージ」、「ファッション道具イメージ」を挙げている。また、いれずみへのイメージについては、女子大生を対象に金子・田中(2008)が検討し、「タトゥーの暴力的イメージ」、「彫り物の美意識」、「刺青の暴力的イメージ」、「刺青のファッション性」、「タトゥーの簡易的イメージ」、「タトゥーのファッション性」、「彫り物の儀式的イメージ」を挙げている。しかし、これらの調査の対象の多くは女子学生であり、世代におけるイメージの違いは詳細に検討されていない。

ピアスやタトゥーなどの身体装飾は自己呈示としての側面もあるといえる。自己呈示のあり方は、肯定的評価を求めるのか、否定的評価を回避するののかによって大きく異なる(小島・太田・菅原, 2003)。菅原(1986)は、賞賛された欲求と拒否されたくない欲求が独立した次元で存在するものであることを確認している。さらに小島ら(2003)は、菅原(1986)の尺度を改訂し、肯定的な評価を獲得しようとする傾向を賞賛獲得欲求、否定的な評価を回避しようとする傾向を拒否回避欲求と定義している。鈴木(2006)や大村・沢宮・奥野・小島(2009)によれば、装いは特に賞賛獲得欲求と関連があることが示唆されている。しかしながら、これらの研究は服飾や化粧等との関連を検討しており、身体装飾と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について詳細に検討した研究は見当た

ない。身体装飾は服飾や化粧等の他の装いと比べ、直接身体に永続的な装飾を施すという点で大きく異なる。そのため、他の装飾行為とは賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連の仕方が異なる可能性もある。

以上をふまえ、本研究では、ピアスやいれずみなどの身体装飾に対する経験や許容、イメージの実態を明らかにし、身体装飾へのイメージと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について検討することを目的とする。具体的には、まず性別や世代ごとに、現在、身体装飾がどの程度経験、許容されているかを検討する。次に、身体装飾へのイメージ尺度を作成し、装飾行為による差、性差、世代差を検討する。最後に、身体装飾へのイメージと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連を検討する。

## 方法

### 調査対象

大学生360名(男性141名、女性219名)、社会人225名(男性81名、女性144名)計585名を調査対象とした。

### 調査手続き

大学生と社会人のいずれにおいても無記名による質問紙調査を実施した。大学生に関しては、授業内で質問紙を一斉配布し、回答を求めた。社会人に関しては、協力者に個別に質問紙を配布し、回答を求めた。

### 調査内容

**身体装飾の経験の有無** ピアス・いれずみを経験したことがあるか、「ある」「以前していた」「ない」の選択肢の中から回答してもらった。「ある」「以前していた」と答えた者に対し、ピアスについては開穴数と開穴部位(「耳たぶ」「耳の軟骨」「鼻」「口」「舌」「へそ」「その他」の選択肢から複数回答)を回答してもらった。

**身体装飾に対する許容** ピアスにおいては、大久保ら(2010)を参考に、他人がしていて受け入れられる(不快に感じない)部位について「耳たぶ」「耳の軟骨」「鼻」「口」「舌」「へそ」の選択肢から回答してもらった。いれずみにおいては、金子ら(2008)の分類や村澤(2006)

Table 1 世代ごとのピアッシング経験の割合

	学生 (N=360)	社会人 (N=225)					全体 (N=585)
		20代 (N=51)	30代 (N=50)	40代 (N=36)	50代 (N=50)	60代以上 (N=38)	
経験あり	15.3% (55)	47.1% (24)	58.0% (29)	27.8% (10)	22.0% (11)	0.0% (0)	22.1% (129)
経験なし	84.7% (305)	52.9% (27)	42.0% (21)	72.2% (26)	78.0% (39)	100.0% (38)	77.9% (456)

括弧内は人数

を参考に、図柄が日本に由来するものを「和彫り」、図柄が西洋に由来するものを「洋彫り」と区別し、図柄の種類と装飾を施した部位の組み合わせによる、「和彫り－ワンポイント」「和彫り－腕・脚等の局部一面」「和彫り－背中全体」「和彫り－全身」「洋彫り－ワンポイント」「洋彫り－腕・脚等の局部一面」「洋彫り－背中全体」「洋彫り－全身」の8つの選択肢の中から、他人がしていて受け入れられる（不快に感じない）ものを回答してもらった。なお、複数回答を可とした。

**身体装飾へのイメージ** 大学生・社会人10名を対象に、身体装飾へのイメージについて個別にインタビュー調査を行い、また金(2006)、金子ら(2008)のイメージ尺度を参考にして35項目を作成した。それらの項目について、ピアスへのイメージといれずみ(和・洋全般)へのイメージを、それぞれ「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答してもらった。

**賞賛獲得欲求・拒否回避欲求** 小島・太田・菅原(2003)により作成された「賞賛獲得欲求(9項目)」「拒否回避欲求(9項目)」の計18項目を使用した。項目について「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答してもらった。

### 結果

#### 身体装飾に対する経験・許容の世代間の差

まず、ピアスといれずみの経験、またその世代間の差を検討するため、経験の有無について集計し、世代ごとに割合を算出した(Table1)。なお、「はい」もしくは「以前していた」の回答は、「以前していた」の回答が少なかったため、

「経験あり」とした。ピアス経験においては、「ピアス経験あり」は、全体では22.1%であった。世代別では、学生15.3%、20代47.1%、30代58.0%、40代27.8%、50代22.0%であった。60代以上でピアス経験のある者はいなかった。20代、30代は他の世代に比べると経験者の割合が5割～6割と高かった。この結果から、ピアスの経験者の割合は、社会人の20代、30代において特に高いことが明らかになった。いれずみ経験においては、全体で6名(30代5名、60代1名)であった。ピアスに比べるといれずみ経験者はわずかであることが明らかになった。

次に、ピアス・いれずみの部位ごと許容、またその世代間の差を検討するため、許容の項目を集計し、世代ごとに割合を算出した(Table2,3)。部位ごとのピアスの許容においては、耳たぶのピアスを許容できる者の割合は全体で97.9%、耳の軟骨は78.6%、鼻は23.3%、口は17.0%、舌は10.5%、へそは54.7%であった。この結果から、耳たぶと耳の軟骨については許容の割合が高いことが明らかになり、他の部位については全体的に許容する者が少なかった。世代差については、鼻、口、舌において、30代では他の世代に比べて許容の割合が高かった。また、へそにおいては、20代、30代において許容の割合が高かった。この結果から、若年層、特に30代では、ピアスへの許容の割合が高いことが明らかになった。図柄と部位ごとのいれずみへの許容においては、ワンポイントのいれずみを許容できる者の割合は、和彫りが全体で69.2%、洋彫りが全体で75.2%であった。腕・脚等の局部一面は和彫りが45.3%、洋彫りが50.4%であった。背中全体は、和彫りが20.7%、洋彫りが21.2%であった。全身は、和彫りが

Table 2 世代ごとのピアスの部位による許容の割合

	学生 (N=360)	社会人 (N=223)					全体 (N=583)
		20代 (N=49)	30代 (N=50)	40代 (N=36)	50代 (N=50)	60代以上 (N=38)	
耳たぶ	98.3% (354)	100% (49)	100% (50)	94.4% (34)	100% (50)	89.5% (34)	97.9% (571)
耳の軟骨	83.6% (301)	79.6% (39)	88.0% (44)	61.1% (22)	68.0% (34)	47.4% (18)	78.6% (458)
鼻	23.1% (83)	40.8% (20)	50.0% (25)	11.1% (4)	6.0% (3)	2.6% (1)	23.3% (136)
口	14.2% (51)	32.7% (16)	54.0% (27)	5.6% (2)	2.0% (1)	5.3% (2)	17.0% (99)
舌	10.0% (36)	18.4% (9)	30.0% (15)	0.0% (0)	0.0% (0)	2.6% (1)	10.5% (61)
へそ	59.7% (215)	73.5% (36)	68.0% (34)	38.9% (14)	30.0% (15)	13.2% (5)	54.7% (319)

括弧内は人数

Table 3 世代ごとのいれずみの部位による許容の割合

	学生 (N=360)	社会人 (N=223)					全体 (N=581)
		20代 (N=48)	30代 (N=50)	40代 (N=36)	50代 (N=50)	60代以上 (N=37)	
和彫り-ワンポイント	77.2% (278)	69.0% (33)	70.0% (35)	44.4% (16)	50.0% (25)	40.5% (15)	69.2% (402)
洋彫り-ワンポイント	81.1% (292)	85.4% (41)	82.0% (41)	50.0% (18)	58.0% (29)	43.2% (16)	75.2% (437)
和彫り-腕・脚局部	50.6% (182)	54.2% (26)	56.0% (28)	22.2% (8)	24.0% (12)	18.9% (7)	45.3% (263)
洋彫り-腕・脚局部	54.4% (196)	60.4% (29)	62.0% (31)	30.6% (11)	36.0% (18)	21.6% (8)	50.4% (293)
和彫り-背中全体	22.2% (80)	20.8% (10)	38.0% (19)	5.6% (2)	12.0% (6)	8.1% (3)	20.7% (120)
洋彫り-背中全体	21.9% (79)	18.8% (9)	44.0% (22)	11.1% (4)	10.0% (5)	10.8% (4)	21.2% (123)
和彫り-全体	6.7% (24)	14.6% (7)	22.0% (11)	5.6% (2)	0.0% (0)	2.7% (1)	7.7% (45)
洋彫り-全体	7.5% (27)	14.6% (7)	24.0% (12)	8.3% (3)	4.0% (2)	5.4% (2)	9.1% (53)

括弧内は人数

7.7%、洋彫りが9.1%であった。この結果から洋彫りのほうが許容できると答えた者の割合が全体的にやや高いことが明らかになった。また、和彫りも洋彫りも、いれずみの範囲が大きくなるにつれて許容の割合が低くなっていくことが明らかになった。世代差については、ワンポイント、腕・脚等の局部一面において和彫り洋彫りともに、学生、20代、30代では他の世代に比べて許容の割合が高かった。また、背中全体、全身においては和彫り洋彫りともに、30代において許容の割合が高かった。この結果から、若年層、特に30代では、いれずみへの許容の割合が高いことが明らかになった。

#### 身体装飾へのイメージについての尺度の検討

ピアス・いれずみへのイメージ35項目に対して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。まず、ピアスへのイメージ35項目での因子分析といれずみへのイメージ35項目での因

子分析をそれぞれ行った結果、因子構造に大きな差はみられなかった。そのため、ピアスといれずみのそれぞれ同じ質問項目をまとめて因子分析を行い、因子負荷量が.40以上であることを基準とし、4因子26項目を採用した(Table 4)。第1因子は「自信がつく」、「するとすっきりしそうである」、「神秘的なものである」といった項目からなっており、「精神的高揚」因子と解釈した。第2因子は「ファッションとしては度が過ぎる」、「おしゃれに見える(逆転項目)」、「ファッションの1つである(逆転項目)」といった項目からなっており、「反抗心による過剰装飾」因子と解釈した。第3因子は「個性を主張できる」、「自己表現の一つである」、「人とは違う自分をアピールできる」といった項目からなっており、「自己呈示」因子と解釈した。第4因子は「痛そうである」、「身体を傷つけるのは怖い」、「ケアが大変そうである」といった

Table 4 身体装飾へのイメージ尺度因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV
I .精神的高揚 ( $\alpha = .879$ )				
8. 自信がつく	.769	-.041	-.047	.020
12. するとすっきりしそうである	.744	-.135	-.158	-.073
5. 高揚感が得られそうである	.730	-.145	-.079	.021
4. 神秘的なものである	.720	-.064	-.133	-.016
32. 精神的な支え(お守り)になる	.696	.067	-.053	-.053
11. 運勢が変わりそうである	.614	-.003	-.050	-.040
25. 大人の階段を登るような感じがする	.565	-.122	.036	.048
7. 度胸があるようにみえる	.553	.159	.102	.105
29. 内面まで変わる気がする	.542	.328	.019	-.004
1. 新しい自分になれそうな気がする	.496	-.329	.178	.016
18. 人生において節目となる	.482	.184	.242	-.063
26. 装いとしてだけでなく、行為そのものに意味を感じる	.441	.211	.121	.006
II .反抗心による過剰装飾 ( $\alpha = .873$ )				
23. ファッションとしては度が過ぎる	-.068	.821	.115	.045
2. おしゃれに見える (R)	.244	-.809	.073	.163
9. ファッションの一つである (R)	.089	-.741	.251	.140
27. 不良のすることだと思う	.106	.738	-.072	.072
24. していると周囲の目が気になる	.036	.710	.160	.091
30. ださい	.028	.665	-.124	.037
35. 威嚇できる	.273	.524	.178	-.020
III .自己呈示 ( $\alpha = .809$ )				
21. 個性を主張できる	-.063	-.062	.862	-.037
16. 自己表現の一つである	-.136	-.256	.798	-.017
14. 人とは違う自分をアピールできる	.191	.127	.668	-.109
22. 印象が変わって見える	-.069	.097	.610	.131
IV .身体装飾への拒否感 ( $\alpha = .661$ )				
10. 痛そうである	-.097	.041	-.027	.719
31. 身体を傷つけるのは怖い	-.003	.254	-.065	.649
17. ケアが大変そうである	.016	-.163	.041	.550
因子間相関				
	I	II	III	IV
I	-	.082	.619	.207
II		-	-.017	.337
III			-	.380
IV				-

(R) は逆転項目を指す

項目からなっており、「身体装飾への拒否感」因子と解釈した。

また、尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、第1因子が.879、第2因子が.873、第3因子が.809、第4因子が.661であり、第4因子の値は高いとはいえないものの、一応の信頼性が確認された。

身体装飾へのイメージの装飾行為による差、性

差、世代差の検討

身体装飾へのイメージにおける装飾行為による差、性差、世代差を検討するため、身体装飾へのイメージの各下位尺度得点を従属変数とし、装飾行為(ピアス、いれずみ)、性別(男、女)、世代(学生、社会人)を独立変数とした3要因の分散分析を行った(Table 5)。

「精神的な高揚」得点においては、性別の主効果( $F(1, 566) = 17.658, p < .001$ )が有意であ

り、女性が男性より得点が高かった。また、世代と装飾行為の交互作用 ( $F(1, 566) = 12.139, p < .01$ ) がみられた。単純主効果を検討した結果、学生において、いれずみがピアスよりも得点が高かった。「反抗心による過剰装飾」得点においては、装飾行為の主効果 ( $F(1, 570) = 1051.792, p < .001$ ) が有意であり、いれずみがピアスより得点が高かった。また、性別と世代の交互作用 ( $F(1, 570) = 9.579, p < .01$ )、性別と装飾行為の交互作用 ( $F(1, 570) = 54.248, p < .001$ ) がみられた。単純主効果を検討した結果、女性において社会人が学生よりも得点が高く、ピアスにおいて男性が女性よりも得点が高かった。「自己呈示」得点においては、性別の主効果 ( $F(1, 573) = 10.249, p < .01$ ) と世代の主効果 ( $F(1, 573) = 15.488, p < .001$ ) が有意であり、女性が男性よりも得点が高く、学生が社会人よりも得点が高かった。また、世代と装飾行為の交互作用 ( $F(1, 573) = 9.479, p < .01$ ) がみられた。単純主効果を検討した結果、学生においていれずみがピアスよりも得点が高かった。「身体装飾への拒否感」得点においては、装飾行為の主効果 ( $F(1, 572) = 22.479, p < .001$ ) が有意であり、いれずみがピアスよりも得点が高かった。また、性別×装飾行為の交互作用 ( $F(1, 572) = 25.335, p < .001$ )、世代×装飾行為の交互作用 ( $F(1, 572) = 9.458, p < .01$ ) がみられた。単純主効果を検討した結果、いれずみにおいて女性が男性よりも得点が高く、ピアスに

おいて学生が社会人よりも得点が高かった。  
**身体装飾へのイメージと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連**

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が身体装飾に対するイメージにどのように影響しているのかを検討するために、「賞賛獲得欲求」、「拒否回避欲求」を説明変数、身体装飾に対するイメージの各下位尺度得点を目的変数とする重回帰分析を、ピアスといれずみのそれぞれにおいて行った (Table 6, Table 7)。

ピアスでは、「精神的 high」において、「賞賛獲得欲求」 ( $\beta = .180, p < .001$ ) と「拒否回避欲求」 ( $\beta = .103, p < .05$ ) から有意な正の影響がみられた。「自己呈示」においては、「賞賛獲得欲求」 ( $\beta = .149, p < .001$ ) と「拒否回避欲求」 ( $\beta = .167, p < .001$ ) から有意な正の影響がみられた。「身体装飾への拒否感」においては「賞賛獲得欲求」 ( $\beta = .104, p < .05$ ) と「拒否回避欲求」 ( $\beta = .206, p < .001$ ) から有意な正の影響がみられた。

いれずみでは、「精神的 high」において、「賞賛獲得欲求」 ( $\beta = .232, p < .001$ ) から有意な正の影響がみられた。「反抗心による過剰装飾」においては、「拒否回避欲求」 ( $\beta = .178, p < .001$ ) から有意な正の影響がみられた。「自己呈示」においては、「賞賛獲得欲求」 ( $\beta = .146, p < .01$ ) と「拒否回避欲求」 ( $\beta = .116, p < .01$ ) から有意な正の影響がみられた。「身体装飾への拒否感」においては「拒否回避欲求」 ( $\beta$

Table 5 性別・世代・行為別平均得点と分散分析結果

	男性				女性				検定結果 数値はF値							
	学生		社会人		学生		社会人		性別 主効果	世代 主効果	装飾行為 主効果	性別× 世代	性別× 行為	世代× 行為	性別×世代 ×行為	
	ピアス	いれずみ	ピアス	いれずみ	ピアス	いれずみ	ピアス	いれずみ								
精神的 high	平均 21.935	25.855	22.150	24.575	25.318	29.220	26.210	26.500	17.658***	0.911	51.669***	0.063	2.158	12.139**	2.085	
	SD 8.625	10.520	9.005	9.497	8.579	10.619	8.236	9.883								
反抗心による過剰装飾	平均 18.194	25.115	17.050	24.588	12.309	24.387	14.464	25.341	29.908***	0.865	1051.792***	9.579**	54.248***	0.257	2.484	
	SD 6.147	5.551	6.063	6.143	4.274	5.320	5.176	5.725								
自己呈示	平均 13.312	13.819	2.238	12.163	13.829	15.124	13.486	13.176	10.249**	15.488***	3.981*	0.118	0.606	9.479**	2.072	
	SD 3.935	4.642	4.664	4.780	3.591	4.094	3.510	4.397								
身体装飾への拒否感	平均 11.734	11.374	11.111	11.395	11.986	12.778	10.393	12.136	4.089*	11.683**	22.479***	3.873	25.335***	9.458**	0.352	
	SD 2.755	3.142	2.627	2.611	2.970	2.236	3.143	2.540								

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 6 ピアスにおける重回帰分析の結果

	精神的高揚	反抗心による 過剰装飾	自己呈示	身体装飾への 拒否感
賞賛獲得欲求	.180***	.011	.149***	.104*
拒否回避欲求	.103*	-.019	.167***	.206***
重相関係数	.232***	.019	.253***	.256***
値は標準偏回帰係数				* $p < .05$ , *** $p < .001$

Table 7 いれずみにおける重回帰分析の結果

	精神的高揚	反抗心による 過剰装飾	自己呈示	身体装飾への 拒否感
賞賛獲得欲求	.232***	-.034	.146**	.049
拒否回避欲求	.081	.178***	.116**	.277***
重相関係数	.266***	.171***	.210***	.294***
値は標準偏回帰係数				** $p < .01$ , *** $p < .001$

= .277,  $p < .001$ ) から有意な正の影響がみられた。

### 考察

本研究では、身体装飾の経験、許容、身体装飾へのイメージについて検討してきた。また、身体装飾へのイメージと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連について検討した。以下において、それらについて考察していく。

#### 身体装飾の経験、許容について

まず、身体装飾の経験については、ピアスにおいて、30代において経験者が多いことが明らかになった。雪村(2005)、村澤(2002)の調査から1999年前後にピアスへの関心がピークを迎えていたことが示唆されている。このことから、今から約10年前に20代であった世代、つまり現在30代を迎えている世代がピアスを積極的に受け入れていたといえる。そのため、30代と他の世代との間において、ピアス経験に差があったことは、妥当な結果であるといえる。いれずみにおいては、経験者数は少数であった。これは、いれずみが社会的に認められていないことが反映されているものと思われる。

次に、身体装飾の許容については、耳たぶと耳の軟骨へのピアス装飾には世代間差がみられず、幅広い世代において許容の割合が高いこと

が明らかになった。これは、青年期に限らず幅広い世代において、耳へのピアスがファッションとして受け入れられているためと考えられる。これまでの研究では、青年期においてピアスが許容的であることが指摘されていたが、幅広い世代においても耳へのピアス装飾が浸透しているといえる。その他の部位へのピアス装飾は世代間差がみられ、若年層の許容が高く、特に30代の許容の割合が高かった。これは、前述のように、現在30代を迎えている世代がピアスを積極的に受け入れているためであると考えられる。しかし、若年層を中心としたピアスの流行であったことから、高年層においては部位によっては浸透していないものと思われる。いれずみにおいては、ピアスと同様に、30代の許容の割合が特に高いことが明らかになった。いれずみと同様、30代は身体装飾に対して許容的であると推測される。

#### 身体装飾へのイメージについて

身体装飾へのイメージについて因子分析を行った結果、4因子が抽出された。「精神的高揚」は、金(2006)のピアスに対する「内面的高揚イメージ」と類似していたが「行為そのものに意味を感じる」という項目もあり、装飾を施す(穴をあける、施術する)行為を通して精神的な変容がもたらされるというイメージも含ま

れていると考えられる。山本(2005)は、いれずみの施術理由として何らかの資格に達したことを示すためや宗教的な観念が絡んでいることを指摘しており、「人生において節目となる」、「神秘的なものである」といったイメージに反映されていると考えられる。また「するとすっきりする」という項目が含まれることから、身体装飾には「ストレスへの秘薬(荻田, 2002)」としての機能も考えられる。「反抗心による過剰装飾」は、他者への威嚇や反抗心が反映されているといえる。ピアスにおいては「外部に対する反抗心」(荻田, 2002)が着用する理由として挙げられている。また、いれずみはヤクザ集団の紐帯を示すものとして施す傾向があり、犯罪と関係していると見なされている(山本, 2005)ことが多い。これらのことから、他者や社会への反抗、また威嚇できるというイメージが析出されたと考えられる。「自己呈示」は、個性や自己表現のために、ピアスやタトゥーをツールとして用いる傾向が反映されているといえる。ピアスやタトゥーは自分を演出するツールにもなり(荻田, 2002)、手軽なファッションの一つとなっているといえる。「身体装飾への拒否感」は、身体を傷つけることへの恐れや、手入れの煩わしさが反映されているといえる。ピアスが普及しはじめた1980年代後半、ピアス皮膚炎が増加傾向にあり、マスメディアを通して報道された(雪村, 2005)。このことから、ピアスを施すことに対し「不衛生である」といった拒否感があることが考えられる。また、いれずみを施すことによる感染症、アレルギー反応などの合併症があること(吉岡, 1996)などから、直接身体を傷つけることへの抵抗感もあると考えられる。

身体装飾へのイメージのピアスといれずみの差、性差、世代差について

ピアスといれずみの差については、いれずみはピアスよりも「過剰装飾による反抗心」、「身体装飾への拒否感」が高かった。これについて、いれずみは江戸時代以来、否定的にみられる風潮があったこと(村澤, 2002)などが関連していると考えられる。また、学生において、いれ

ずみはピアスよりも「精神的な高揚」、「自己呈示」が高かった。アイデンティティを発達させつつある青年にとって、衣服によって行われた社会的分類は、自分自身を帰属させたり、自己と他者を区別したりするうえで重要な参照基準の機能を担っている(太田, 1996)。ピアスがカジュアル化・ポピュラー化(荻田, 2002)した現代の若者にとって、他者との差異を意識するという点では、ピアスによる装飾の効果は薄れているものと思われる。そのため、同じように身体に直接装飾を施し、社会的にも特異な存在といえるいれずみに関心が向くようになったのではないかと考えられる。

性差については、女性はピアスといれずみ両方において、男性よりも「精神的な高揚」、「自己呈示」が高かった。女子大生がピアスをしたり、いれずみを入れたい理由としては、開運や自己変容を目的としており(金子・桜井, 2004)、調査でも「ファッション性」と「自己顕示性」が女性では高いことが指摘されている(金子ら, 2008)。女性の間でのピアスの浸透を踏まえると、女性はピアス、いれずみといった身体装飾を、自己の精神を高揚させ、自己呈示するためのものとしてもとらえて、用いていると考えられる。一方で、女性はいれずみにおいて、男性よりも「身体装飾への拒否感」が高かった。日本でのいれずみの施術人口の比率は男性のほうが女性よりも高い(山本, 2005)ことから、女性は男性に比べいれずみに対して、施術の痛みへの恐怖等のイメージも強くもつことから実際に施術する者が少ないと考えられる。そして、男性はピアスにおいて、女性よりも「反抗心による過剰装飾」が高かった。日本において、女性のピアスは社会的にも浸透しているが、ピアスをする男性はまだ特殊な人間と見られる状況がある(北山, 1999)。現在でもその傾向があるため、ピアスを装着することによって他者からもたれる印象は男性と女性では異なり、ピアスに対するイメージも男女によって差が生じたものと思われる。

世代差については、学生はピアスといれずみ両方において、社会人よりも「自己呈示」が高

かった。前述の太田ら(1996)の指摘のように、青年期において衣服は、自分自身の帰属や自己と他者を区別する重要な手段と成りえる。身体装飾においても、自分自身を「どのようにみせるか」という青年期の自己呈示の手段として用いていると考えられる。一方で、社会人になると、身体装飾が就職等で不利になるというイメージも考えられ、「自己呈示」のための手段としては用いられにくいと考えられる。また、社会人はピアスにおいて、学生よりも「身体装飾への拒否感」が低かった。雪村(2005)、村澤(2002)の調査にもあるように、現在30代を迎えている世代が特にピアスを積極的に受け入れている。本研究では、ピアス経験者の割合は、20代~30代の社会人は約5割程度とピアス経験者が多かった。これらのことから、20代~30代のピアスへの許容的な意識が、社会人のピアスへの拒否感の低さに影響しているものと思われる。最後に、女性においてのみであるが、社会人のピアスに対する「反抗心による過剰装飾」が学生よりも高かった。幅広い世代において耳へのピアス装飾が浸透しているという今回の結果とは矛盾するように見えるが、30代以上のピアス経験は許容的な意識とは異なり低い結果であった。ピアスに対して、許容的であってもそのイメージは、不良的、もしくは儒教の影響による「親からもらった身体を傷つける」のは良くないとする考え(村澤, 2002)が少なからず残っていると推測される。

#### 身体装飾へのイメージと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について

ピアスにおいては、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が高い人ほど、「精神的高揚」、「自己呈示」が高かった。宇野・近藤・中川(2006)の調査によると、学生のピアス経験者がピアスを採用した理由の8割が「服装に合わせておしゃれをたのしみたいから」であった。このことから、まだ社会にでていない学生のピアス経験者にとって、ピアスは衣服と同様に自己を高揚させるだけでなく、自己をアピールするための気軽なおしゃれとしてとらえられていると思われる。一方で、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が高

い人ほど、「身体装飾への拒否感」が高く、特に拒否回避欲求が高い人ほどその傾向は強かった。ピアスは服飾と異なり、永続的な装飾である。後戻りすることができず、他者からの否定的な評価を回避したいと思う傾向のある人は、やり直しがきかない身体装飾は避けようとする傾向があるのではないかと推測される。

いれずみにおいては、賞賛獲得欲求が高い人ほど、「精神的高揚」、「自己呈示」が高かった。また、拒否回避欲求が高い人ほど、「反抗心による過剰装飾」、「自己呈示」、「身体装飾への拒否感」が高かった。しかしながら、今回の調査において、いれずみ経験者は6名と極めて少数であり、この点については慎重に解釈する必要がある。日本においていれずみは、ピアスに比べまだ広く許容されていないため、否定的な評価を回避しようとする傾向がある人ほど、他者から許容されないことを恐れ、いれずみに対して反抗的で過剰な装飾であるといったイメージを抱きやすいものと思われる。いれずみにおいては、痛みへの恐怖だけではなく、社会的に許容されていないという側面が自己呈示としていれずみを用いることへの抵抗感に影響していると考えられる。

#### 今後の課題

本研究では、ピアスやいれずみなどの身体装飾に対する経験や許容、イメージの実態を明らかにし、身体装飾へのイメージと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について検討した。調査の結果、特に30代において、身体装飾への経験・許容が高いことが明らかになった。身体装飾へのイメージについては、4因子が抽出され、それぞれのイメージについて、性差や世代間差がみられた。身体装飾へのイメージは、自己呈示のあり方に関わる賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の両方と関連していることが明らかとなった。

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。まず、ピアス着用の可不可や身体装飾への許容は職種の影響を大きく受けるものと思われる。そのため、今後、職種をふまえた検討が必

要であると思われる。次に、身体装飾へのイメージ4因子すべてに性差がみられたため、今後、イメージを詳細に検討するにあたっては性別ごとの検討が必要であると考えられる。最後に、身体装飾によってどのような自己を呈示したいかは本研究では検討していない。ピアスといれずみでは、呈示したい自己にも差があるものと推測され、より具体的な検討を行うべきであるだろう。これらの課題を踏まえ、今後研究を展開していくことが必要であると考えられる。

### 引用文献

- 大坊郁夫 1922 外見印象管理におけるブランド選択と流行意識 北星学園大学文学部北星論集, 29, 91-113.
- DeMello, M. 2000. Bodies of inscription: A cultural history of the modern tattoo community. Duke University Press.
- 藤原康晴 2005 服飾の心理作用 藤原康晴・伊藤紀之・中川早苗(編) 服飾と心理 放送大学教育振興会
- 金子智栄子・桜井礼子 2004 女子大生のピアスに対する意識と人生観 文京学院大学研究紀要, 6, 111-120.
- 金子智栄子・田中保子 2008 女子大生の刺青とタトゥーに関する知識：彫り物イメージと自意識との関連について 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 252.
- 荻田かなえ 2002 ニッポンのお子さま(第6回)ボディピアス 家庭フォーラム, 10, 44-47.
- 金愛慶 2006 日本の若者におけるピアッシング行為に関する一考察：自傷行為との関連性を中心に 白梅学園大学・短期大学紀要, 42, 13-28.
- 北山晴一 1999 衣服は肉体になにを与えたか：現代モードの社会学 朝日新聞社
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- 村澤博人 2002 ピアスの時代「おしゃれ白書1991～2000」より 化粧文化, 42, 78-81.
- 大久保智生・鈴木公啓・井筒芽衣 2011 青年期におけるピアッシング行為への許容と動機：身体装飾としてのピアスに関する研究(1) 繊維製品消費科学, 52, 113-120.
- 大村美菜子・沢宮容子・奥野誠一・小島弥生 2009 容姿へのこだわりと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 日本パーソナリティ心理学会第18回大会発表論文集, 198-199.
- 太田裕彦 1996 人を得る：人間の発達と着衣行動 中島義明・神山進(編) まとう：被服行動の心理学 朝倉書店
- Sanders, C. R. 1989 Customizing the body: the art and culture of tattooing. Philadelphia: Temple University Press.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求：公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究, 57, 134-140.
- 鈴木公啓 2006 装いと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 パーソナリティ研究, 14, 230-231.
- 宇野保子・近藤信子・中川早苗 2006 身体装飾について：第1報 ファッション意識との関連 中国学園紀要, 5, 1-8.
- 山本芳美 2005 イレズミの世界 Tattoo: Anthropology of Body Decoration 河出書房新社
- 吉岡郁夫 1996 いれずみ(文身)の人類学 雄山閣出版
- 雪村まゆみ 2005 現代日本におけるピアスの普及過程：新聞および雑誌記事のフレーム分析 奈良女子大学社会学論集, 12, 139-157.